

宮崎市の動物園の歩み

宮崎市フェツニックス自然動物園

園長

出口智久

目次

- 一 はじめに
- 二 動物園誕生
 - (1) フェツニックス自然動物園誕生
 - (2) 宮崎市フェツニックス自然動物園の誕生
- 三 動物園のあゆみ
 - (1) 主な出来事
 - (2) 主な繁殖動物
 - (3) 導入動物
 - (4) 施設の推移
 - (5) 入園者の推移
 - (6) 動物園入園料の推移
 - (7) 飼育動物の推移
- 四 教育・レクレーション
 - (1) 動物園サマースクール
 - (2) 移動動物園教室
 - (3) 各種コンクール
- 五 研究・自然保護
- 六 最後に

一、はじめに

宮崎市フェニックス自然動物園は、平成十三年（二〇〇一年）九月八日に新たな一步を踏み出して、速いもので六年が経過しました。

振り返りますと、この間、宮崎市の動物園として、多くのお客様を迎えることができたことも、また、一度閉園した動物園が今もこうして存続できていることも、動物園が地域社会と共に歩み、市民の皆様が支持していただいている賜物と感謝しているところです。

昭和四十六年（一九七一年）、フェニックス自然動物園が誕生して以来、宮崎市フェニックス自然動物園として引き継がれ活動している現在まで、どのようにして歩んできたのでしょうか。この動物園としての歴史は三十六年に及び、その間、動物園を取り巻く環境は、日々刻々と変化して参りました。今後においては、ますます速いスピードで、しかも幅広く、動物園が担う社会的な役割は、多様性を広げていくものと思われまます。ここに、市の動物園の歩みを少しひも解いてみたいと思います。

そもそも、動物園とはどういった存在なのでしょう。この質問をします。

「動物園とは何でしょうか？」

社会人といわれるおとなの方に、また、実習に来た大学生や高校生、課外授業として接した時の小中学生に、機会あるごとに、この問いを投げかけることにしています。すると、最初に返ってくる答は、「動物が多数いるところ。」それを、だんだん発展させていくと、「動物について知るところ、学習するところ、調べるところ。」や「癒されるところ、家族で楽しむところ。」、「野生動物を守るところ。」などの答が多く返ってきます。この答えは、私達、動物園に働く者にとっては大変にありがたいことです。

動物園といっても、多種多様の形態や目的を持ち、日本において

は、法制上の定義はありません。一部諸外国のような、開園、閉園等の許認可制度もありません。一方、博物館法（昭和二十六年…一九五一年）によつて、動物園（水族館も含む）は博物館の一形態とされています。ここでは、「博物館とは歴史、芸術、民俗、産業、自然科学に関する資料を収集し、保管（育成を含む）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関であつて、博物館登録簿に登録されたもの。」とされています。当園は、博物館相当施設として認証されています。

こういった状況下、日本の主だった動物園は、水族館といつしよに、社団法人 日本動物園水族館協会を組織しています。入会においては、入会員入会審査要綱に基づく資格審査が行なわれています。そして、入会するのに、少なくとも現在はハードルの低いものではありません。

ここに加盟する動物園では、四つの社会的役割もしくは機能があらるといわれております。

一、教育

二、レクリエーション

三、研究

四、自然保護

ここで、「動物園とは何でしょうか？」の質問の答えを見ていただくと見事に一致します。このことで、宮崎の方々の動物園認識度の高さを推し量ることができるとは思いません。蛇足になります。私が動物園社会に飛び込んだ昭和五十二年（一九七七年）当時にも、この四つの目的はありました。ただし、現在の表現より幾分か範囲を狭くしておりました。紹介しますと、「教育」は「社会教育の場」として、学校教育とは切り離されており、なおかつ「場」という一言がつけられておりました。「レクリエーション」は「レ

クリエーション(慰安)の場」、「研究」は「調査研究の場」と呼ばれておりました。そして、「自然保護」は「自然保護思想普及の場」とかなり回りくどい言い方であったことを記憶しております。近年は、この「自然保護」を「種の保存」とも呼び、自然の状態では絶滅が危惧される種を少なくとも動物園界では、多くの動物園が協力し、遺伝的多様性を保ちながら保護増殖して、絶滅から免れようとするものです。そして、その種の生息環境を改善し、将来的には自然復帰を目指そうというものです。更に、現在は、動物園が所在する地域の動物(在来野生種、近年在来家畜品種を含む動きがある)を保護していこうとする動きも出てまいりました。先に述べました従来からの外部の希少種の保全活動を、「域外保全」といい、後者の身近な動物を対象としたものを「域内保全」と呼んで自然保護の両輪としています。

近代の動物園は、一七五二年にウィーン・シエンブル動物園に始まるといわれています。日本では明治十五年(一八八二年)に東京都恩賜上野動物園が博物館の附属施設として開園したとされています。「動物園」という言葉は、慶応二年(一八六六年)に、「西洋事情」の中で使用されたといわれています。

日本の動物園の概略を説明した上で、宮崎市の動物園について述べさせていただきます。

二、動物園誕生

この動物園は、二回の誕生を経験することになります。一度目は昭和四十六年(一九七一年)三月二十四日に、フェニックス自然動物園として開園しました。そして、平成十三年(二〇〇一年)九月八日に宮崎市フェニックス自然動物園として、二度目の開園を迎えます。

(1)フェニックス自然動物園誕生

フェニックス自然動物園の創設については、まだ高校生であった私は、当時人気を集めていた週刊誌朝日ララース「世界動物百科」(朝日新聞出版)の通巻第一号のトピックス(三ページ)で、宮崎市に、新しいタイプの動物園誕生として紹介された記事によって知りました。それは、タイトルが「異種動物を同居飼育」で、日本ではじめての熱帯地方の動物が見られ、種類の違う動物を同じ環境のなかに放し飼しようとするという内容の短い記事でしたが、当時の私には、アフリカのキリンやシマウマ、ダチョウ、レイヨウと一緒に飛び回る姿を想像して、ワクワクさせるのに十分だったことを覚えています。それと、猛獣はいないとのが、妙に記憶に残っています。私が、動物園に飼育係として勤めるのは、それから、六年後のことですので、創設期のこととは、実際に体験しておらず、当時の話を伺ったり、機関紙「あしおと」の記事をたどることになります。

「あしおと」の創刊号(一号一九七一年)に、フェニックス自然動物園設立者であると共に、フェニックス国際観光株式会社社長であった佐藤棟良氏は、「あしおと」発刊に際して」と題して、次のように記載されています。

「宮崎県内には、これまで動物園がなく、県内の方々には、動物を見るためには遠く熊本や鹿児島まで足を運ばなければなりません。毎年、知事さんや市長さんのもとには、沢山の子供たちや教育関係者から「早く宮崎にも動物園をつくって下さい。」との年賀状や手紙が殺到し動物園建設が大きな懸案事項となっていたようです。この話を耳にした私(佐藤社長)は、知事さん、市長さんのたつてのご依頼もあり、住吉海岸に建設することになった総合施設の中に、動物園、遊園地を含めることを決意し、動物園界の権威者であります元上野動物園々長、古賀忠道博士にご指導を仰ぎ、約十億円をかけて動物園建設に踏み切ることにい